

「延原家・井上家」の 史的考察

会員 田中康之

一、はじめに

田中康子(编者注 筆者の奥さん)の実家である延原家と実母・延原小塩の実家井上家についての歴史的な記録によるご先祖の起源に関する研究成果を記述して後世の為の資(し)としたい。

これから目を通す各資料を理解するために、先ずその要点を記し、次に各資料(後記資料1～4 及び別添参考資料1～2)を紹介したい。これらの史実により、「延原家」「井上家」のご先祖の方々が時代の波に翻弄されながらも、その時代その時を命懸けで生き抜いてこられて、現在の我々子孫にまで「命・いのち・生き血」を脈々と繋ぎ続けて下さっている事に思いを致し、心に銘記し、重ねて「深い感謝と合掌の一念」を心から捧げなければならないと思う。

これから、記述する数々の詳細な史実は、全て後記する先史古代研究会・山崎泰二氏(岡山歴史研究会副会長)との奇しきご縁を戴いた事に起因するものである。山崎氏のご指導に深く感謝して「延原家」「井上家」についてのご先祖の歴史的資料に基づき、実地調査も含めて説明しよう。

二、南朝美作七忠臣並

なんちょうみまさか

忠死二十人総忠魂碑

「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」
平沼騏一郎・謹書 岡山県久米郡久米南町の浄土宗開祖・法然上人の誕生寺・境内に昭和9年7月に建立され、その後平成7年に「誕生寺第二駐車場」に移設された、この「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」の建設費寄進者名を記し

た銅製銘板「原田佐秀後裔・縁故者」に、刻印されている住所・氏名の中に「小原・延原鞏男(かたお)・同令(令室・延原小塩)」と、田中康子(旧姓延原)の父母の氏名が克明に刻まれている。



総忠魂碑の前にて 筆者夫妻

この「総忠魂碑」については、私の若き時代今から約57年前の「思い出」からスタートするのである。それは、昭和32年夏、私の妻・田中康子(旧姓延原)のご両親に結婚のお許しを戴く為に、岡山県久米郡中央町小原(現在の久米郡美咲町小原)の延原家を訪問した時の事である。大歓迎を受け、ご両親のご快諾を戴いた。その折に、お父様から「私の延原一族の遠い先祖の事で、ご案内したい処があります。」と約2^{km}南西にある浄土宗の開祖・法然上人の生まれた誕生寺境内にある「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」に詣でた。

お父様は、「私達延原一族は南朝・後醍醐天皇に忠誠を誓い京都で、時の北条幕府と奮迅の戦って忠死した原田三河守佐秀の後裔・縁者で。この総忠魂碑の建設費を寄進しまし」、銅板製の銘板に刻まれている寄進者のご両親の名前を説明されました。その後、この事は私の頭の片隅に記憶していましたが、それ以上の詳細な事は先史古代研究会の山崎氏とのご縁を戴くまでは判りませんでした。

三、真光寺の「贈・從五位原田佐秀の碑」

岡山県真庭郡木山大字鹿田真光寺(現在、真庭市落合町鹿田 216)に建設されたと「梅花餘香(よこう)」に記録されている、原田佐秀の碑の建設費寄進者を記した銅製銘板の中に「小原・延原喜佐衛門」の名前がある。この延原喜左衛門は、田中康子の祖父・延原彦左衛門の本家の長男であり、久米郡加美村大字小原(現在の久米郡美咲町小原)の地で屋号・塚之元と呼ばれ、庄屋を勤め、代々に亘り苗字帯刀を許されていた。また代々「院殿・大居士」の戒名を授与されている家柄である。その分家・延原彦左衛門(田中康子の祖父)の家系もまた同様に「院殿・大居士」の戒名を授与されている。

この真光寺真宗・佛光寺派の・守城俊道住職に電話にて、境内にあると思われる原田佐秀碑の現状についてお尋ねしたが、ご住職は「境内に無い。先代の住職からも聞いた事は無い。」とのご返事でした。・・・時の流れは如何ともしがたし。これからの郷土史研究の課題の一つでしょう。

前記の「梅花餘香」は、原田佐秀が從五位の官位を授与された事を祝し、併せて美作菅家七流のうち官位を授与された七人及び忠死者二十人の名誉を祝し、又その冥福を祈るための記念事業として、建武中興六百年目の昭和9年に誕生寺境内に総忠魂碑が建設された。その折に「建碑会」により編纂された記念誌が「梅花余香」である。

四、「南朝・美作菅家七流と延原家」

平安朝時代、菅原道真の父・菅原是善は、天安二年(858)に備前の国司となり、道真の子孫も又、天和二年(1682)讃岐守となり、子孫も作州地方に土着した。菅原道真から九代目の子孫菅原知頼は美作守に、その子の真兼は押領使に

又、その子孫菅原道真から十三代目の菅原満祐(満佐・満資)は三穂太郎(三歩太郎)と称し、奈義地方に実在した人物である。京都まで三歩で歩いて行った。又奈義山に腰を下ろし瀬戸内海で足を洗った・・・等々の民話を持つ巨人伝説的人物で、三穂太郎は、博学で京都御所の警護使の役職を務め、領地民達にも善政を行い深く尊敬されていた。



国道 53 号線 県境近くにある神社
門前の三穂太郎の碑

三穂太郎には七人の男子があり、それぞれ居住地の地名を苗字として、美作菅家七流と称した。それは、有元忠勝、広戸、福光、植月、原田、鷹取、江見の美作菅家七流で、城持ちの武士団である。

この中の五人目の子、原田日向守忠門は、久米郡加美村原田にある稲荷山城を居城として美作菅家党の一翼を固めていた。田中康子の実家延原家は、久米郡加美村大字小原(現在の久米郡美咲町小原)に居住し美作菅家稲荷山城主原田家一門の有力な後裔・縁故者一族として、近郷同族と共に原田家を支え続けて来たのである。

延原の姓は原田家の居城である久米郡加美村原田から延びて来た一族だから「延原」になったと伝えられている。

前記の山崎氏の研究により後日判明した事であるが、「南朝美作七忠臣並忠死二十人総忠魂

碑」の詳細が明確になった。

原田佐秀(すけひで)は、菅原満祐(三穂太郎)の七人の男兄弟「美作菅家七流」の五人目原田忠門の子孫である。元弘三年(1333)二月伯耆^{ほうぎ}の国の船上山にて名和長年が隠岐の島から脱出した後醍醐天皇を擁立し、各地の有力武将達に檄を發し参加を求めた。

美作菅家は宗家の有元佐弘を始め一族七流の各武将が呼応し、騎馬武者三百騎を率いて総勢千五百人の勢力で、後醍醐天皇京都帰還を助けた際の際の原田一党の武将である。時の北条鎌倉幕府を倒して後醍醐天皇中心の建武の新政を樹立した。この京都侵攻の時に、元弘三年の京都・四条猪熊の合戦にて奮戦し、美作菅家七流の武将の内の有元佐弘、有元佐光、有元佐吉、福光佐長、植月重佐、原田佐秀、鷹取種佐の七武将、騎馬武者二十名、及び多数の手勢が戦死した。

その後、時代は流れ南朝後醍醐天皇を助けた忠臣の評価が見直されて、大正天皇により大正4年11月10日、従四位に有元佐弘、弟の有元佐光、従五位に次弟の有元佐吉が官位の追贈を受け、大正8年11月15日、従五位に植月重佐、鷹取種佐が、続いて大正13年2月11日には従五位に福光佐長、原田佐秀の計七名の各武将がそれぞれ官位を追贈された。これを記念して美作菅家の原田党の後裔・縁故者が、騎馬武者二十名を含め、その名誉を祝し併せて美作菅家七流の多数の忠死者に深く思いを致しその冥福を祈る為に、昭和9年に誕生寺境内に建立したものである。

現在の真庭市落合町の真光寺に有ると云う「贈・従五位原田佐秀の碑」も、同様に美作菅家原田一党の後裔・縁故者が官位追贈を祝し、又その冥福を祈り建立した碑である。

五、ご先祖がお導きの「奇しきご縁」

延原家と井上家

この度、平成24年秋の一日思いがけず山崎氏からのお誘いを受けて先史古代研究会の会員有志達と一緒に車にて、美作菅家と後南朝の関係史跡を探訪した。先ず久米南町の誕生寺にある「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」に詣で延原家と原田佐秀との関係を確認。この時、妻の記憶では誕生寺境内にあると云われている原田佐秀の墓所を探したが素人では確認できなかった。

次に田中康子の実母延原小塩(旧姓井上)の実家井上家の先祖の居在地の赤磐郡吉井町是里物理(もどろい)(現在の赤磐市是里物理)にある「井上氏先祖之碑」に詣で、その碑誌を拝読し井上家先祖の起源について勉強し、この是里物理に居住した経緯の一端を理解することが出来た。



井上氏(うじ)先祖之碑

この時「井上氏先祖之碑」建設者氏名銘板の中に「井上龍太郎」(延原小塩^{かずみ}の次弟井上一三の長男)の名前が克明に刻まれているのを発見して、大変に感激し懐かしく感じた。井上龍太郎は田中康子の従兄妹にあたり、ご夫妻から大変なご厚情を戴いた事を、今でも有り難く感じて居る。

この度の探訪にて、延原・井上両家のご先祖に関わる確証的な史実・史料についてははっきりとした認識を持つことが出来て心から嬉しく思っている。

これらの史実により、先ず、延原家は美作菅家

七流の一党原田氏と、きわめて、深い血脈・同族的な繋がりを維持して居たこと。そして、夫々のご先祖達、皆それぞれの時代にその時の状況に応じて、全身全霊・命懸けで生き抜いてこられ、現代の我々子孫まで「命・いのち・生き血」を脈々と繋ぎ続けてくださっている事に、唯ただ感銘を受け深く感謝して、心からの合掌を捧げたい一念である

次に、井上一族は、その昔から信濃国に勢力を保持していた一族であり、源平合戦の時に、木曾義仲の軍勢と共に京都に進撃、さらに西国へと転戦して、播磨・備前地方に勢力を得た。その後、主家・浦上宗景一族の家老として宇喜田直家との戦いで天正三年(1575)に居城の天神山城(備前和気)を失い、その後各地を転戦、最後に山深い是里の地に在居した事を知る。これらの事から、時代の波に翻弄されながらも、井上一族はその時代その時を懸命に生き抜いて下さって、今日の我々子孫に至って居る事を心に銘記し重ねて、深い感謝と合掌の一念を心から捧げなければならないと思った。

これら延原家・井上家のご先祖についての確証的な史実を、これほどまで明確に探求できたことは、偏に「先史古代研究会」の機関紙“きび考”の編集事務局長・山崎泰二氏との奇しきご縁と、山崎氏ご自身の考古学・歴史・民俗学に関する卓越した深い知識と旺盛なる研究心に拠るところが多である。

それに重ね加えてもう一つ、同じく「先史古代研究会」会員で、“きび考”の編集委員井上秀男氏との、山崎氏を通して戴いた新しいご縁のお蔭であると驚いている。

井上秀男氏も、また山崎氏と同様に考古学・歴史・民族学に関する豊富な知識と積極的な研究心により、地道で永い間、ご先祖・井上氏一族が信州から西国への転進、そして是里居住の由来について、各地の史実を実地調査されて、極めて正確な資料に基づいた研究成果「信濃から

西国に下った井上一族」を機関紙“きび考”第5号に発表された。早速、拝読させて戴き、井上氏一族の大変なご苦勞を偲び感服し、理解納得させて戴いた。改めてご先祖達への感謝と、井上家の研究成果へ感謝を申し上げるところである。

それから、更に重ねての「奇しきご縁」の話であるが、井上秀男氏と田中康子とは、実に血縁の深い親戚同志である事が判り、お互いに大変に驚いたところである。田中康子の実母・延原小塩(旧姓井上)の実家は、是里の物理(もどろい)にあり、現在は延原小塩の長兄・井上忠雄の三男豊志の奥様・朝子様が健在で実家を護って居られ、平成24年11月「井上氏先祖之碑」参拝の折には、我々一行五人を出迎えて下さり、手作り「栗おこわ」での歓待を戴いた。心温かい「おもてなし」に対して深く感謝して次の探訪地へと向かった。

井上秀男氏の家系が井上家の宗家で、尊父賀弥太氏は地元では著名な郷土史家で「井上家先祖碑」も一族で建立された。

妻康子の母(小塩)の実家は、宝暦五年(1755)に井上七郎右衛門が井上宗家から分家する。屋号を向新屋(むこうしんや)と称して今日まで続く。その後天保八年(1837)頃に向新屋から井上源次郎が分家し、源次郎の子初五郎に至り、忠雄と小塩(こしお)兄妹が生まれ、小塩は延原家に嫁ぐ。田中康子の実母で延原小塩の実家は、忠雄の息子の豊志が継いだが今は亡く、その奥さんが朝子さんと、分家筋を一人で守っている。朝子さんは康子の従兄の嫁になる。若かりし頃が懐かしい。井上本家筋と分家は代を重ねても、一族の結束は固い。(写真参照)

(この項の史実は井上秀男氏の指導を得ました)